

「boid paper」vol.2の79ページ本文中に文章の脱落がありました。謹んでお詫び申し上げますと共に、下記のように訂正いたします。

←正しいページはこちら

◎ 79 ページ 1 段目最終行～ 2 段目 1 行目(※太字が脱落箇所)

【誤】

同じ磯崎新建築の秋吉台国際芸術村に向かうため、バ
いると、サングラスをかけた五十代くらいの男が誰か

【正】

同じ磯崎新建築の秋吉台国際芸術村に向かうため、バ
ス^{が来る時間}をホテルのロビーで待っている、サン
グラスをかけた五十代くらいの男が誰かとの電話で

ようにさつと車を降りて「最近聴いてる曲の歌詞と一
緒だ!」とぐんぐん畑に近づいていく(aiko)「あ
る日のひまわり」。炎天下、涼しげな水色のポロシャ
ツが汗でくたつと変色するまで夢中で写真を撮り続け、
下を向くひまわりに当然のごとく目線を合わせる後ろ
姿はとてつもなく輝いていて、少し速まきの日陰から
それを見ていた私は不意に振り向いたゆつきゆんに
「なんでそんなに笑ってるの!？」とウケられるほど愉
快な気分が満たされていた。

二週間後、山口への旅では初日にYCAMでの爆音

『BUS 映画から船出した映画館』と伝説の「女将
劇場」を同日に体験できたことがやはり印象的だった。
荒波に揉まれながらも、本気で「ぶざける」をやって
いくということ。かつてジミヘンの生まれ変わりと称
されたのだという女将にサインをもらった友人の砂田
くんは、酔っ払った夜道でふいに不安そうな表情にな
り、リュックをがさごそと漁って、自分が色紙を失く
してない事がわかるとようやく安堵した表情で宿泊
先の漫喫へと帰っていった。次の日の昼、YCAMと
同じ磯崎新建築の秋吉台国際芸術村に向かうため、バ

スが来る時間をホテルのロビーで待っていると、サン
グラスをかけた五十代くらいの男が誰かとの電話で
「もういつべん言ってみい、ぶち殺すぞ!」と声を張
り上げる。横の席でうたた寝していたお婆さんとのコ
ントラストも相まってありえない場に立ち会った感が
ものすごく、脳みそがピカピカに覚醒していくのがわ
かった。翌日に秋芳洞という観光名所に立ち寄ってみ
たら、お土産屋さんの軒先に「ぶちうまつ! ぜんざ
い」と書かれた張り紙があって、ぶち殺すの「ぶち
」は方言だったのだと静かに合点。他にも湯田温泉の街
角で、種田山頭火の言葉が彫られた石碑に目を凝らし
たら、一言目に「ちんぽ」と書かれていたことなど
感動した。大の大人がお金を集めて、会議して、公共
の場にこんな言葉を書き込んで。

振り返ってみると、自分は旅の時間の中でも、特に
「びっくり」を感じる瞬間に強く惹かれていることが
わかった。出発前は事前に細かくプランを立てないと
安心できない性格でもあるけれど、家に帰ってくる
と結局、自分の想像をべろんと一枚めくられた瞬間のこ
とばかりが思い出される。敬愛するジョナス・メカス
が日本への旅について「冒険であり、エデュケーション
」と表現している記事があったけど、なにかに驚く
と脳内にはこつと無垢なスペースが生まれて、そこに
新しい知識や感情が疑いもなく張り付いてくれる感覚
がある。

GINZZAチームで関わったシンガポールでの
上映会や、大規模な反政府デモと時期が重なったイン
ドネシアへの旅についても触れたかったけれど、文字
数の関係で今回は断念。後者については現地合流した

